そな～れ通信

令和５年９月号　第９３号
★デイサービスそな～れ
〒424-0901
静岡市清水区三保 1800-1
TEL　054-335-0400

★小規模多機能ﾎｰﾑそな～れ
★グループホームそな～れ
★居宅支援事業所そな～れ
〒424-0901
静岡市清水区三保 1598-14
TEL　054-335-0376
FAX　054-335-0506
Email　npo.sona-re@za.tnc.ne.jp
URL　https://sona-re.net
X　@sona_re

共生社会の実現を推進するための認知症基本法
「木工房 いつでもゆめを」（富士宮市）の実践

今年６月に「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」が成立しました。単に「認知症基本法」ではなく、“共生社会の実現を推進する”という言葉を冠している点が肝になります。2025 年には 65 歳以上の５人に１人が認知症になると言われており、自分がいつ認知症になってもおかしくありません。「たとえ認知症になっても、社会から孤立したり生きづらさを抱えたりしないよう、支え合う仕組みを作り、認知症の人が希望を持って暮らせる共生社会を実現する」という理念を掲げた法律です。法律が出来たからといって、何かがすぐに変わるわけではありませんし、新たな仕組みを住民主体で生み出していかなくてはなりません。まずは先駆的な素晴らしい実践から学ぼうということで、オープン 10 周年を迎える認知症の方の仕事場「木工房いつでもゆめを」（富士宮市）を訪ね、お話を伺いました。

富士山と茶畑を望む作業場
天気が良ければ外で作業も

現在、木工房には 10 人程の認知症の方が週２回出勤し、１日３時間働いて給料も出る（時給千円）。仕事が終わったら、カラオケや花見やゴルフの打ちっぱなし等、お楽しみもいっぱい。就労支援事業所ではなく、一般の会社。公的サービスではないので制約を受けずに済むが、自分達で稼がないと会社を継続できない。主力商品「車椅子用体重計」は 10 年間で約６００台を販売。他にも「テーブル付き流しそうめん台」等、木製の介護用品をいろいろと作っている。

所狭しと並ぶ機械はプロ仕様

ある従業員の方は、若年性認知症の診断後に会社をクビになり、自信を失くして家に引きこもっていたが、木工房に来て自分の出来る事を見つけ、段々と笑顔になり、仲間との会話も増えて元気になっていった。「まだまだ働きたい」「社会の役に立ちたい」という気持ちは皆、強い。曲線をきれいに切り出す電動糸のこ盤を、未経験の認知症の方が上手に操れるようになった。出来なくなる事がある一方で、新たに出来る事もあるのだ。

現在、従業員のうち２名がピアパートナーとして、認知症当事者の立場から認知症セミナー等で想いを語る活動もしている。共生社会の実現に向けた啓発活動において、当事者からの発信は欠かせない。商品を青空市で販売し、お客さんと会話したり、社会とのつながりは広がり続けている。

写真立てにやすりをかける

体重計の部品にニスを塗る

自分のペースで作業ができる安心の職場

作業中は各人が黙々と手を動かし、まさに勤務中。昼休み、弁当を食べながら男性がボソッと「やっぱ、体が動くうちは外に出た方がいいかな」。隣の男性が「そうだよ、出た方がいい」。食べ終わった二人は静かに煙草を吸いに。言葉少なでも心許せる関係であることが伝わってきました。木工房には“仲間”がいて“仕事”がある！　当事者が望むことはサポーター（支える人）ではなく、パートナー（共に生きる仲間）という言葉も心に響きました。

三保のあの頃　よもやま話（２）　映画館

「昔、三保にあった映画館は？」と聞くと、昭和 30 年代に栄えた『三保劇場』と答える人は多い。しかし戦前に『平和館』という劇場があったことはご存知だろうか。場所は三保一小から三保街道への通りの真ん中辺りで、周囲は茶畑だった。映画のある日は楽隊がラッパや太鼓を鳴らし、村中をまわってビラを撒き宣伝をした。テレビが出回る前は映画が庶民最大の娯楽だった。当時は活動写真といって観覧料は 10 銭というから安かった。旧清水市内にはオペラ館はじめ、永寿座や敷島館など芝居小屋も兼ねた映画館が建ち並び、多くの俳優が訪れたという。

男子は嵐寛寿郎の『鞍馬天狗』などの時代劇に夢中で、よくチャンバラごっこで遊んだものだった。女子は特に田中絹代の『愛染かつら』がお気に入りだった。いずれもシリーズもので次回作が待ち遠しく、遠くの映画館まで自転車を漕いだ時のワクワクする記憶は、今でも鮮明に覚えているという。映画は青春時代の楽しい思い出の一コマであった。

北村昭夫（三保在住　富士山世界遺産ガイド）

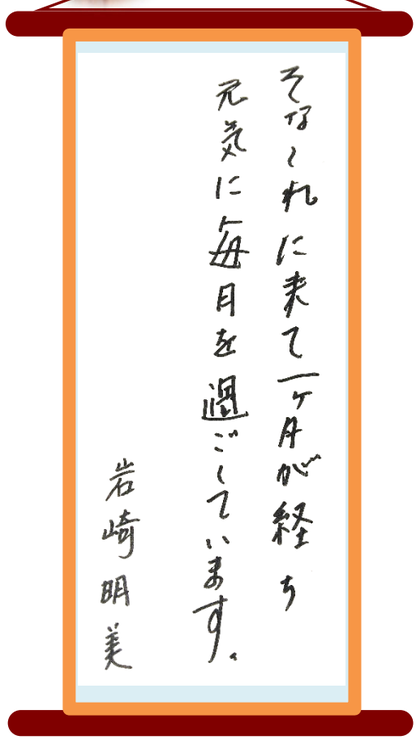
お出かけ情報⑭　ミキサー食でも名物を

旅の大きな楽しみの一つに、その土地の名物を味わうというのがあります。でも、障害によってはそれが簡単にいかないことがあります。ある時、嚥下障害のあるお子さんを連れて旅行に来ると言う親御さんから相談を受けました。「子供は食事をミキサーにかけた状態にしないといけない。外出用に既にそういう状態になった製品も売られてはいるが、旅先では自分達が注文する料理と同じ物を子供にも味わわせたい」という希望でした。家族皆で「これがここの名物か！　美味しいね」という気持ちを共有したいという親御さんの思いに胸を打たれました。と同時に「小型の電動ミキサーを持参できるが、店内でミキサーの音が周りのお客さんの迷惑にならないか、電源をとることを店側が許可してくれるか」と心配される親御さんの言葉にハッとさせられました。言われてみれば、私自身、飲食店の客席でミキサーがガーッと鳴っている場面に出くわしたことがありません。想像力が欠けていました。

中継ぎ役の私は、事前に観光スポットにある飲食店に事情を説明し、当日はミキサーの電源が取りやすいよう、コンセントに一番近いテーブルへのご案内をお願いしました（充電式のミキサーもありますが、その方がお持ちの物はコード式でした）。また、周りの目が少しでも気にならないよう、ピーク時を避けた時間帯を店から聞いて、親御さんに伝えました。

障害のある方の旅行はお一人お一人、抱える悩みが違います。“その方にとって”というオーダーメイド感覚が必須です。

小規模多機能ホーム
ご利用
岩崎明美様
（79 歳）
のお言葉



ほっとアルバム

デイサービスから

◆みんなで力を合わせた 敬老会

８月から少しずつ練習を始め、小道具も手作りして、皆で準備を進めてきました。

当日は『いい湯だな』の踊りに笑いが漏れ、『斎太郎節』の美声に酔い、ハーモニカに合わせて『ふるさと』を手話で歌い、出し物はいろいろ。変装や小道具の出し入れの方に時間がかかりましたが、そのドタバタ感も含めて楽しんで頂きました。

また『次郎長踊り』や『南京玉すだれ』をボランティアの方々が披露して下さり、さらに盛り上がりました。ありがとうございました。「(自分の出番に)緊張したよぉ。汗びっしょかいちゃった」「良い会になったね。楽しかったよ」との声。皆さん、お疲れさまでした。

◆手作りおやつ

敬老会では縁起物の「フクロウ」を練り切りで作り、お抹茶で頂きました。細かい手作業に奮闘。なぜか作る人の顔に似てくるのが不思議。

暑いお彼岸でもおはぎをしっかり作って胃袋へ。

小規模多機能ホームから

◆すいか割り

今年の夏祭りはスイカ割り。大きく振りかぶって～!!　ガックリされる方や「当たった～」と喜ぶ方。大盛り上がりの夏のイベントでした。やっとの思いで割った真っ赤なスイカは、甘くて美味しかったです。

◆花火

もう一つの夏の風物詩、花火を行いました。

「何年ぶりにやったよ」「怖いよ」など、子供の頃の思い出話をしながら、夏の夜を楽しみました。

グループホームから

◆夏の暑さにも負けず

輪投げの輪や卓球のラケットを握りしめ…。あらっ、いつもより背筋も腕も伸びています。若返り効果バツグン！

◆猛暑続き かき氷でひと涼み

初体験のかき氷機でガリガリガリ。赤(いちご)、緑(メロン)、青(ラムネ)と、色鮮やかなシロップをかけて「涼」を満喫！　「うまいっけね」

◆秋を味わう

旬の栗ご飯に、具だくさんのきのこ汁。カニ入りの厚焼き玉子もお手のもの。まぐろの照り焼きも好評。

足踏みしている“秋”さん、早く来てね。